

で、そのお陰で診察を受けられ、入院し、大事に至らず治りました。班長は「えこひいき」が激しいので評判は悪く皆から敬遠されていました。

中支・南支戦線

駆け歩き記

福島県 鈴木 利 平

私は、大正五（一九一六）年三月一日、福島県喜多方市豊川町米室字能力堰下で生まれ、本年、八十七歳となりました。

私の軍歴は、昭和十九（一九四四）年三月十五日、補充兵として教育召集で会津若松の歩兵連隊東部第二十四部隊へ入隊しました。二十八歳でした。

私が入隊した当時の私の家庭状況は

父・母 健在 農業（田八反・畑二反）

長男（私） 〃 徴用 川崎市の日本鋼管勤務

二男 〃 仙台の陸軍へ在隊していた

三男 〃 海軍へ入隊していた

妹五人 〃

上の三人は結婚して他家へ縁づいていた。

下の二人は未だ学生で父母と同居と言ったものでした。

さて、若松の歩兵部隊へ入隊した私が、最初に苦しめられたのは、対抗ビンタでした。軍隊へ入るまでの私は、およそ犬畜生でもない人間がホウベタを無抵抗で連打されるなんて言う事は想像もしていません。しかも新兵同士、相手に多少の遠慮をして力を加減していると、横で監視している古年兵が「メガネを外せ、歯をくいしばれ、脚を肩幅に開いてふんばれ」と要求し、それこそ力いっぱいになぐりつける。新兵はそれを見習って叱られないようにする。

こんな野蛮な制裁が横行するなんて思まわしい限りでありました。しかも手で殴るより帯剣のべ

ルトでやられるともう地獄でした。流血。歯の折損。口腔内の挫傷。耳の鼓膜の破損等々。まれには兵営外の地方専門医の治療を受けた悪例もありました。今思い出してもおぞましい限りです。しかも同じ会津地方の郷土部隊内でのこと。

ビンタとともに新兵が苦しめられたのは下痢でした。新兵は御承知の通り分秒を惜しんで動かさず。食事もゆっくり噛んでなんて駄目。おまけに精米も不十分な玄米に近いもの。悪い条件が重なり合つての下痢でした。数も多かったようです。

朝の中隊の舎前での点呼のとき、下痢が続いて体力の弱い者が何かのことで、「一步前へ！ 営庭カケ足○周！」は苦しい。汗をかく。ところが全身ビッショリの汗かきで、これで下痢が治つたと。とにかく苦しみの連続で毎日の日が暮れて終わるまで日が長いこと。三カ月の教育召集は長かったです。

夜就寝でベッドへ入って寝るのは頭と足と一人

おきに入れ違いになりました。これも常識はずれのこと。

やがて三カ月も済んで満期になり、班長、上等兵、古兵殿に頭を下げて挨拶すると「満期で地方へ帰っても直ぐ次の召集だ。身辺の整理を注意して怠るなよ」といしましめられました。警告された通りでした。

六月 十五日 召集解除、たったの十日して
六月二十五日 原隊へ臨時召集です。

中支派遣軍第十三師団（鏡第六八〇五部隊第二中隊）へ配属となり、屯営で約一週間の準備で被服、兵器、弾薬の受領、予防接種等を済ませて、列車輸送で博多港へと出発しました。

当時は、制海権、制空権とも残念ながら敵米軍に握られており、支那大陸への原隊追及の道中の安否も不安でした。博多より釜山への海上輸送も大変で対空対潜の警戒もきびしく、無用の者は上甲板へ出ることを禁止でした。

補充兵受領業務の下士官の一人が「今、日本を出たら二度と帰れるかどうか分からん。最後の見納めじゃ。よく見ておけ」とこっそりと許可してくれました。同じ会津人でも屯営の人と野戦の人と大違いじゃと思つたことでした。海軍の駆逐艦が数隻で、波間に見え隠れするように船団を護つてくれているのを見て心強く感謝しました。

さて、いよいよ釜山へ入港。上陸して鉄道輸送への切り替えで、貨車に乗る。奉天（瀋陽）、山海関、浦口で下車。列車が所定の車庫（停車場）に着くと、プラットホームに四斗樽があり、飯や汁が入っている。兵隊は飯盒を持って飯や汁を取り、列車に入って食事をする。食器洗淨の水は有ったり無かったり。

時として車から降りて体操もする。また排便のため集団で用を足す。すべて野外で集団行動するのだ。壯観である。何かにつけて集団の威力を知らされる。そして指導と規律と迅速を要求される。

浦口より南京へは、揚子江（長江）を渡り大きい船で揚子江を遡る。日本内地の山紫水明とは大違いで流れる河は黄濁し、水中の黄土の含有率も高く思われる。流速は早く渦巻いているものもある。水深測定を慎重にし、浅瀬や、流れ浮く物を見張って用心深い航行をする。昼間のみである。夜間は停止して動かない。沿岸の風景も大陸的で珍しい。農夫が鋤を使って農作業する姿も散見される。日本とは異なり何とも言えぬ緩慢さがあり戦友と顔を見合わせて笑つた。

漢口へ着く。高い時計台があつたのを覚えていた。対岸の武昌へ渡河する。今は大きい橋が架設されてバスに乗り一走りであるが、当時は長い高い水際の階段を上がり下りして渡し船で渡河した。交通量は多く混雑していた。

武昌から列車輸送で岳州へ。一カ月ここで駐屯。適当な建物が無いので天幕を張って、幕舎生活でした。

一カ月が終わり、出発の間際になって米空軍の空襲があり、混乱もあったが損害もなくてよかった。いよいよ行軍で南下し、原隊追及の始まりである。湘桂作戦への参加である。

原隊の第十三師団は支那戦線では第三、第六やその他の古豪師団に伍して遜色がない勇猛をもつて知られている精強師団である。「先輩勇士に劣らぬ戦果を挙げて勇名を轟かすように頑張れ」との訓示があり、心身の緊張も一段と高まるのを感じました。鏡兵団という防諜名でした。

毎日、原隊追及の強行軍の連続で、補充兵の我々はまず足を痛め、足の皮や肉がとれて骨が出ている重傷者も出ていました。痛さ苦しさに堪え兼ねて手榴弾で自決者を出した中隊もあった由。私の第二中隊では皆がかばい合い、銃や重い持ち物は分隊員同士で持ってやり、何とか落伍や犠牲を防ぎました。それにもっと大事な事は中隊長さんが郡山市の神主さんで、とことん兵を大切にしないで無理をさせないお人柄でしたので、作戦中は勿

論のこと、終始損害防止に熱心なため、我々は助かりました。

とは言え私は不幸にもマラリアと脚気にやられて苦しみました。小さい野戦病院へ入院加療してようやく一命をとりとめ無事原隊復帰できました。危険なのはマラリアの上をゆく「天狗熱」で、これはあまりの高熱のため脳がこわれる程だそうで、この病気でだめになった人も若干人ありました。

桂林、柳州、宜山へと進撃しました。部下を大事にする中隊長さんのお陰で損害はなく、元気で行動できました。宜山では約一カ月間駐留しました。「今度はどこまで行くんじゃろうか?」「決まっておる。ヒマラヤのエベレスト山だよ」「エベレスト! これはタマラン、タマラン」と最後は決まって大笑いです。頓智で皆を笑わせ楽しませる戦友はどこにもいる。

さて、どこまで続く南進かとの思いもようやく

終わり、反転作戦となり北へと戻る。それと察し敵の支那軍は追尾して友軍の反転を妨害する。振り切り振り切り友軍の主力に離れ離れにならぬよう進む。前進より後退がむずかしい。

昭和二十年八月、湖南省衡陽付近において終戦となる。まさに青天の霹靂。呆然自失。連隊長以下全連隊員謹みて軍旗奉焼。連隊長の訓示も涙のため声にならず、途切れとぎれの悲泣の状態。連隊全員涙にくれ虚脱状態でした。

続いて武装解除。将校の日本刀から乗馬、銃や砲隊の駄馬まで敵に引き渡す。もの言わぬ馬も長年の日本軍との別れに気持ちも不安らしく、尽きぬ名残がよく感ぜられた。

抑留生活中は軍紀風紀を重んじて、日本軍の誇りと規律を中国の軍官民に示すことにより、より早い帰還に結びつくとの自覚に徹し、心ない一部の支那兵、人民よりの暴行、侮辱等にも隠忍自重して耐えたことであります。

昭和二十一年五月、待望の帰国となり、上海より博多港に上陸復員し、武運長久を喜び合いました。若松部隊への教育召集より数えて約二カ年の軍務に出征、作戦参加の年月でした。平凡な陣中生活のみで特記する程の戦陣戦闘もなく、労苦調査の趣旨に酬いこともできません。

昭和二十三年十一月結婚し、現在まで夫婦共に元気で農業に励んでおります。子どもは一男三女をもうけ、孫は十一人です。全員元気で私共老人に安心を与えてくれています。毎日無事平凡なことを最高の幸福と心得て神と仏に感謝しております。

最後に八十七歳の高齢者としてありがたい日本の国に、何の不足もなく生活させて頂く私共が、祖国の現状を見て将来を考えますと、若い青少年に対する教育、育成をしっかりと確立して欲しい。過保護に走らず、武士道精神とか教育勅語の徳目とか、日本伝統文化の継承復活を強く望んで止みません。

先の大戦で祖国日本弥栄の礎として散華された
数百万人の英霊の御冥福をお祈り申し上げます。

峯兵団陣中回顧

山梨県 矢崎 文男

私は大正十一（一九二二）年七月二十日、山梨
県東八代郡中道町下向山に生まれた。

昭和十七（一九四二）年徴集、同年十二月十五
日、東部六十四部隊（千葉県佐倉）に入隊、翌昭
和十八年一月四日、佐倉発、釜山―山海関（鮮満
国境通過）―天津―濟南―徐州―浦口乗船―武昌
鉄道で威寧―蒲圻―長安に下車、独立混成第十七
旅団独立歩兵第九十一大隊（峰六部隊）に配属さ
れ、山砲第一中隊で通信業務に服す。

馬が一三〇頭位おり、厩舎の建設築造のため中
国人の民家を解体し厩舎用材に再使用する。その
解体作業に従事し、長材である梁をロープで引き

倒す折、八人でロープを持ち、私は解体物に対し
て最短部を握り、渾身の力を入れて強引に引いた
ので、梁は確保されたが、そのはずみで長大梁の
先端が足に当たり、骨折負傷す。このために第一
期検閲は不参加となる。

だが隊長は「矢崎は解体に当たり率先して危険
な先端部のロープを握り、全力を尽くして解体作
業に従事しての負傷であるから考慮すべきだ」と
のことでした。

昭和十八年四月、湖南進攻作戦があり、部隊は
岳州へ、私は負傷の傷癒えず残留する。この湖南
作戦は昭和十八年七月五日頃にはほぼ終わり、部隊
は湖南省威寧県馬橋に移駐し、砲兵部隊の警備に
当たる。

たまたま部隊で木炭の需要があり、炭焼き経験
者を求められたので名乗りをあげ、支那人を使
い、早速木炭窯を作り、周辺の松材で製炭したと
ころ出来栄えが見事で農村出身者が重宝がられ